

英語

京都大学 (前期)

<全体分析>

試験時間

120分

解答形式

記述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・**増加**)難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

読解総合：2024年度にあった空欄補充問題は出題されなかった。

説明問題が大問Ⅰ、大問Ⅱともに出題されている。大問Ⅱにはさらに語句の説明を含んだ和訳問題が出題された。

英作文：和文英訳は例年通り。自由英作文は2025年度と同様大問Ⅳとして独立し、テーマを与えて論考することを要求する出題で、合計で80語から100語で書くものであった。

その他トピックス

なし

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	読解総合	「大気生物学の再活性化」 (715words)	注はあるものの aerobiology 「大気生物学」という学問に馴染みがなく、戸惑った人が多かったのではないかと推察。 (1) 1文目は get refocused の訳出が難しい。それ以降構造的に難しいところはないが、3文目の to merge ... の副詞用法の不定詞の処理、from across wider stretches of the sky の訳出が難しい。 (2) コロン (:) の後の that spoon は同じパラグラフ2行目の a spoon を受けている。most new to science は thousands of species を説明しており、most of which are new to science とほぼ同義。2文目は Looking for ... (S) had left (V) the vast majority of species (O) unseen (C) という構造をつかむことが大前提。あとは nothing but ... の意味、および dishes full of food のここでの意味をつかむ必要がある。3文目の Now は直前の過去完了との対比で用いられている。testify to ... は「...を立証する；...を証明する」の意味。「発見された遺伝子の数だけ生物種がいる」ということを示した文だが、難しい。 (3) it turned out は主節が挿入された形で「...ということが判明した」の意味。The air was a zoo. の内容は、下線部の直前の2文の内容をまとめる。解答欄に余裕があるが、無理に必要以上のことを書く必要はない。 出典：Carl Zimmer, <i>Air-Borne: The Hidden History of the Life We Breathe</i> , 2025.	標準
II	読解総合	「メソポタミア文明が現代に及ぼす影響—知識の記録方法の重要性」	(1) 標準的な語彙力と文構造把握の力を身につけてきたかどうかが問われている下線部和訳問題。Just as S V ..., so S V ~. は正確に訳したい。ここでの there は be 動詞の後で補語的に働いており、be there 全体で「存在している」という意味。decode 「...を解読する」は難しかったかもしれないが、お	標準

		(579 words)	<p>およその意味合いは文脈から推測可能だろう。</p> <p>(2) to do so を先行する文脈を踏まえて具体化したうえで、下線部全体を和訳する問題（「パラグラフの内容に即して」という設問の指示はややあいまいで、「下線部(b)が含まれるパラグラフの内容に即して」などより明確な指示をすべきだったのではないだろうか）。解答用紙の罫線は 13 行も引かれているが、そこまでスペースが必要な解答にはならないので、戸惑った受験生もいただろう（解答用紙の罫線が不必要なほどに多いのは他の設問にも共通する）。to do so の具体化としては「メソポタミアの王たちは現代の私たちが彼らの碑文を読んでいるとは想像だにしないだろう、と私たちが考えること」という内容を中心にしつつ、その前提となる記述を盛り込んでいけば十分。fallacy は難しい単語だが、これまでに取り組んだ長文問題等で目にしたことがあった人も多かったはず。</p> <p>(3) returning to them の言わんとしていることを補足しながら全体を訳す下線部和訳問題。1 文目は from writing ... to returning to ... 部分が、have come full circle を説明していることが理解できているかどうか大きなポイント。come full circle は「(一周して) 元に戻る」という意味。現代の「セラミック製のマイクロフィルム板」は、ある意味メソポタミア文明で用いられた「粘土板」と同種のものであることを考えると、記録媒体としては一周して元に戻ったと言えるということ。2 文目は This が前方の内容ではなく、コロンの(:) 以下を指していることを見抜けるかがポイント。あとは標準的な語彙力があれば訳しきれるだろう。</p> <p>出典 : Selena Wisnom, <i>The Library of Ancient Wisdom: Mesopotamia and the Making of History</i>, 2025.</p>	
III	英作文	「人生の選択」	<p>2025 年度と同様に処理しやすい出題で、これまでの学習で身につけた力がストレートに解答に反映する出題となっている。「腹をくくる」は直訳の効かない部分であるが、文意を考えて対応したいところ。基本的な事柄をきちんと身につけた受験生は高得点が望め、そうでない受験生との間に差をつけられる問題ではないだろうか。</p>	標準
IV	英作文	「世界を住みやすい場所に変えるために」	<p>「世界を住みやすい場所に変えるためにできる 1 つのことを説明せよ」というかなり漠然とした設問。2025 年度と文言は変わってはいるが、「導入→本文→結論」の流れで書くようにという指示が付され、解答用紙は 1 行に 4 語書ける形のもので、20 語ごとに印がついている点も 2025 年度と同様。この種の解答用紙の場合、単語を数える手間は省けるが、ミスに気付いた場合の修正にかなり手間がかかるので、解答用紙に書き始める前に、しっかりと考えておかなければならない。</p>	標準

注 : 区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は 5 段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

読解問題では今年度は英文和訳問題と内容説明問題という構成だったが、2024年度のように空欄補充問題が出題される可能性も考慮に入れて、和訳だけに偏らずバランスの取れた学習を心がけること。内容説明問題では、該当箇所をどこまで正確に読むことができるか、どこまでを解答に盛り込むかが問われる。英作文では大問Ⅲは英訳問題で定着した。過去問の英訳問題の練習を含め、各人の実力に合わせた演習を積む必要がある。自由英作文問題は、2025年度がテーマを与えた上での論述問題。2024年度が英文に関連した意見論述型問題。2023年度が会話文下線部補充問題、2022年度が意見論述型、2021年度が会話文下線部補充問題、2020年度が手紙の形式、2019年度が2024年度と同じく英文に絡めた意見論述型…と、形式が固定されていない。今後も形式が変わる可能性は十分にあるので、さまざまな形式の問題に触れ、実際に答案を作る演習をすることをすすめる。